ほっかいどう学について

北海道開発局　開発監理部　開発計画課

■北海道総合開発計画における「ほっかいどう学」

平成２８年３月、「世界の北海道」をキャッチフレーズとする新たな北海道総合開発計画が閣議決定されました。

同計画では、本格的な人口減少時代にあって、地域を活性化し、価値創造力を高めていくためには、自ら考え地域づくりに取り組む地域の担い手を育成、確保することが重要であるとし、地域に関する理解と愛着を深めるために「ほっかいどう学」を促進することが盛り込まれています。

北海道開発局では、今後、子どもから大人まで、より多くの人々が地域づくりに関心を持つ契機を創出するため、北海道の地理、歴史、文化、産業等の北海道の魅力や個性について幅広く学ぶ取組として、「ほっかいどう学」を展開していきます。

■新たな北海道総合開発計画に関するシンポジウム～「ほっかいどう学」の展開に向けて～の紹介（平成２９年３月２１日開催）

平成２９年３月２１日、北海道開発局では、有識者の方々による基調講演及びパネルディスカッションを通して、「ほっかいどう学」の更なる推進を図り、地域づくり人材の発掘・育成に資することを目的に、「新たな北海道総合開発計画に関するシンポジウム～『ほっかいどう学』の展開に向けて～」を開催しました。

ここでは、このシンポジウムについて紹介します。

冒頭、開発監理部次長の原から開会挨拶があり、「新たな北海道総合開発計画では、人こそ資源と位置付け、人口減少時代であるからこそ、地域づくりに取り組む人材を発掘・育成することを目指すこととしている。『ほっかいどう学』はその取組の一環であり、北海道の魅力や地理、歴史、文化等について、子どもから大人まで幅広く学ぶことができるように取り組んでまいりたい」と述べるとともに、本シンポジウムが「ほっかいどう学」の取組のキックオフとして有意義なものとなることを祈念しました。

続いて、開発監理部開発計画課長の竹原から、「新たな北海道総合開発計画に位置付けられた『ほっかいどう学』の概要等について」と題し、新たな北海道総合開発計画の概要や同計画における「ほっかいどう学」の位置付け、「ほっかいどう学」の推進方針、「ほっかいどう学」に関する学びのイメージ等について説明を行いました。

北室　かず子　氏

続く「基調講演－Ⅰ」では、「北海道をつくった技術者たちの“ノブレス・オブリージュ”」と題して、ノンフィクションライターで編集者の北室かず子氏から講演をいただきました。北室氏は、“ノブレス・オブリージュ”を直訳すると、「高貴であることは義務を伴う」という意味であるとし、恵まれている者は、自発的に無私の行動を起こさなければならないという自覚や矜持、誇り、使命感のようなものとしました。

その上で、「近代以降の北海道には、自己が持つ力を人のために役立てること、そのために自己を向上させていくという“ノブレス・オブリージュ”の精神を持つ技術者たちの足跡がたくさんある」と述べ、人が大地と取り組んで作ってきたというのが北海道の歴史であり、そこには“ノブレス・オブリージュ”の大きな気持ちがあったとして、講演を締めくくりました。

新保　元康　氏

「基調講演－Ⅱ」では、「ほっかいどう学のすすめ」と題して、札幌市立発寒西小学校校長（※当時）の新保元康氏から講演をいただきました。新保氏は、新たな北海道総合開発計画の策定過程において、「ほっかいどう学」に関する提言をされた方であり、冒頭、「昔は、小学校で北海道のことを勉強していたが、今はほとんど勉強しなくなった。北海道への愛着や関心が十分に育てられていないのではないかという問題意識を持っている」と述べられました。

そして、「小学校を卒業して６年後、１８歳で選挙権が与えられるようになったが、道民の代表である北海道議会議員を選ぶためには、北海道に関する知識が必要である。例えば、新たな副読本を作ったり、インフラに関する教師向けの研修を行ったり、子ども向けのホームページを作ったりしながら、「ほっかいどう学」に取り組んでいく必要がある」と述べ、講演を締めくくりました。

基調講演に続き、一般社団法人北海道開発技術センター理事であり、同センターの地域政策研究所長である原文宏氏をコーディネーターとして、基調講演をいただいた北室氏、新保氏に加え、国立大学法人北海道教育大学教育学部准教授であり、同校の学校・地域教育研究支援センター、生涯学習・地域連携部門長である今尚之氏をパネリストにお迎えし、パネルディスカッションが行われました。

パネルディスカッションの様子

冒頭、コーディネーターの原氏は、「政治と教育は一見両極端なところにあるように感じるが、政治家を選ぶのは国民、市民、地域の住民であり、その尺度は一人ひとりが持っている知識や経験である。そういう意味で、実は政治と教育とは非常に強く結びついているのではないか。そのような中で、国土交通省の計画に「教育」が盛り込まれたのは、画期的なことである」と述べられるとともに、本日のシンポジウムを「ほっ

かいどう学」の取組のキックオフとして、今後、徐々に北海道の中に「ほっかいどう学」を根付かせていけるように取り組んでいく必要があるとしました。

パネルディスカッションでは、①北海道の魅力やすばらしさについて、②「ほっかいどう学」の展開に向けての二つのテーマについて、パネリストの方々からご意見やご提言をいただきました。

ここでは、各パネリストからいただいたご意見やご提言をいくつか紹介します。

（テーマ１：北海道の魅力やすばらしさについて）

- 北海道には、人や技術に関する歴史、遺産がたくさんある。これらを事実に基づいて再構築し、物語性を持ったものとして発信していくことによって、北海道を支えている社会資本を見る目が深まるのではないか。（北室氏）
- 厳しい自然環境を克服し、時には利用しながら、特に近代以降、非常に短い時間で多くの努力をし、手間暇をかけて北海道のエクメネ（人が常に居住し、経済活動や規則的な交通活動を行っている地域）を拡大し、日本の発展に貢献してきた。そういう北海道の物語自体が北海道の大きな魅力の一つである。（今氏）
- 先日卒業した６年生に、“北海道の良いところ”を自由に記述してもらった。「自然が豊か」とか「食べ物がおいしい」という記述が多かったが、一方で、「歴史」や「第二次産業」、「第三次産業」、「世界」、「未来」に関する記述はなかった。子どもたちが書かなかったものの中に、「ほっかいどう学」の取組のヒントがあるのではないか。（新保氏）

（テーマ２：「ほっかいどう学」の展開に向けて）

- 「ほっかいどう学」の可能性は非常に大きい。学習モデルの作成のほか、学習キット・パッケージの作成・提供、副読本の作成、Ｗｅｂでの情報発信など、学校現場に届けていくことをゴールとして取り組んでいきたい。（新保氏）
- 教育のことを考えるときには、「内容」、「方法」、「仕組み」の三つを考えることが必要。博物館の学芸員や図書館司書との連携等も含めて、「ほっかいどう学」の展開に当たっても、この三つをしっかりと考えていかなければならない。（今氏）
- 今後とも、フリーライターとして、エッジの効いたコンテンツを作り上げて、北海道の魅力やすばらしさを伝えていきたい。（北室氏）

各パネリストによる熱心なディスカッションの後、コーディネーターの原氏が、「公共事業や社会資本整備の社会的意味、その裏で支えている人や技術をキチッと知っていただくということを基本にして取り組んでいかなければならない」、「自分自身の経験から言えば、教育に浸透し、成果が見えてくるまでには非常に時間がかかる。最低でも１０年はかかるという覚悟を持って、皆さんと手を組み取り組んでいきたい」と総括され、シンポ

会場の様子

ジウムを終えました。

北海道開発局では、本シンポジウムにおいて、有識者の方々からいただいたご意見やご提言を踏まえ、関係機関等とも連携を図りながら、今後、「ほっかいどう学」の取組を推進してまいります。